



# TSF Vtuber ニコト

DOJIN  
R18  
成人向け

女騎士の城



【僕】「み、ミコトちゃん……!」

動画サイトを見ながらオナニーしている僕は、  
独身で童貞のしがないサラリーマンのオッサンだ。

数年前に偶然見つけた、姫原ミコトのレイプ動画を見て

二目惚れをしてしまい、毎日動画を見てオナニーしている。

最初のうちは、こんな美少女とセックスできたら!

そんな想像をしてオナニーしていたが、

いつしか、こんな美少女に生まれ変われたら!

そんな想像をするようになっていた。

そして、実際に生まれ変わるのは無理でも、

バ美肉（バーチャル美少女受肉）であれば可能なのではと考え、

大量の時間と、稼ぎの大半を費やし、3Dモデルを作り始めたのだった。







【僕】「ふひひっ…で、出来た…ついにミコトちゃんの3Dモデルが出来た！」

毎晩毎晩、ミコトちゃんのレイプ動画を穴が開くほど見て、隅々まで再現した3Dモデル。顔や体型や髪の毛はもちろん、肌の質感、乳首の色とサイズ、あそこの形まで瓜二つだ。もちろん、その分とんでもない金と数年という長い時間はかかったが、これからこのモデルで動いたり、生放送が出来ると思うと、それだけで頭がクラクラして、心臓がバクバクする。



【僕】「でも、流石にここ半年は寝不足とモンエナ続きで、少し疲れたな…。放送は明日からにしよう」

興奮が寝不足か疲れか、動悸があまりにも酷い。

僕は気絶するようにベッドに倒れ込んだ。





僕が身体が動かせず眠り続けていると、僕が会社に来ない事を心配した同僚が部屋にやってきて、大慌てで救急車を呼び、僕は病院に運ばれていった。目は開かなかったし、身体感覚も無かったが、音や声は遠くから聞こえており、自分がどういう状況にあるのか、なんとなく察した。

【医師】「カフェインのとりすぎ、疲労の蓄積、そこに興奮が重なって、心臓に負担がかかり、脳の血管が…」

断片的にはあるが、そんな声が聞こえてきた。

確かに、睡眠時間は1日2時間、それをこまかすためにカフェイン剤の大量摂取、さらにモンエナもガブガブ飲んで、毎日数回もオナニーをする。

あんな無茶苦茶な生活をして、マトモな身体でいられるわけがなかったのだ。

それでも、ミコトちゃんの3Dモデルを作りたい、そしてミコトちゃんになりたい。その情熱を止める事は出来なかった。

【医師】「心臓マッサージを…！ 電気ショック…！」

医師の声がさらに遠くなっていく。これはもうダメかもわからんね。

せめて1回くらいは、ミコトちゃんのモデルで配信したかったな。

というか、どうせ死ぬなら今度はミコトちゃんのような美少女に生まれ変わりたい。

そんな事を考えながら、僕の意識は暗転していった。





1. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
2. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
3. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
4. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
5. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
6. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
7. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
8. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
9. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
10. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
11. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
12. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
13. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
14. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
15. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
16. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
17. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
18. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
19. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000
20. 100-0000	100-0000	100-0000	100-0000



【僕】「…ん？　ここはどこだ…？」

僕の意識が暗転してからどれだけの時間がたったのか、僕は不意に目を覚ました。もしかして完治したのだろうか。でも、目覚めた場所は病院ではない。どこかで見た事のある和室だ。僕が身体を起こすと、恐ろしいほどに軽い。体重もかなり落ちていたようだ。それに髪の毛もかなり長くなっていて、おっぱいが大きくなっていて…。

【僕】「…おっぱい！？　なんでおっぱいがあるんだ！？」

僕は慌てて身体を確認する。細く白いしなやかな手と脚。折れそうなくらい細い腰。サラサラで触り心地の良い髪の毛。程よく張りのあるおっぱいと、ピンク色の乳首。そして股間に慣れ親しんだモノは無く、あるのは毛の生えていない割れ目…。信じられない事だが、どうやら女の体になっているらしい。生まれ変わったのか？　それにしても、いきなり成熟した身体になっているのは不思議だ。そんな事を考えながら部屋を見渡し、姿見に映る自分を見て、僕は腰を抜かしそうになった。









【僕】「……これ……ミコトちゃんじゃないか!? 僕がミコトちゃんに!」

そして僕はすぐに気がついた。これは僕が作った3Dモデルだ。同時に思い出す。この部屋はミコトちゃんの部屋として僕が作ったものだ。つまり、信じられない事だが、恐らく僕は死んだことによつて、本当にバーチャル美少女受肉をしてしまったのだ。

【僕】「……そんな事ありうるのか? いくらなんでも!」

ここが僕の作ったミコトちゃんの部屋だとすれば、クローゼットの中には、ミコトちゃんのモデルが完成したら、着せようと考えていた衣装が多数あるはずだ。

【僕】「あつた! 競泳水着とか、セーラー服とか! これはもう間違いないな!」

僕はミコトちゃんのモデルという肉体で、バーチャル空間の中に入り込んでしまったのかもしれない。









【僕】「……とりあえず着替えを……」

僕は全裸よりも着衣の方が好きなタイプだ。

ミコトちゃんモデルが完成したら

着せようと用意していた服に袖を通す。

まずはオーソドックスなセーラー服だ。

【僕】「……似合いすぎでしょ……可愛すぎる……」

真っ黒で地味なセーラー服なのに、びっくりするほど可愛い。

パンスト越しのスベスベした脚、ちらりと見えるお腹、非の打ち所がない。

こんな美少女が僕なのだ……そして僕である以上、この身体をどう使おうが僕の自由だ。

僕はおそろおそろ手を伸ばし、パンスト越しに割れ目に触れると、

それと同時に、びっくりするほどの快楽が走り、僕の身体は震え上がった。









「僕」「ひっ！な、なんだこの感覚っ！ああっ！」

パンスト越しでもわかる柔らかい肉を、  
細い指先で擦り上げていく。  
あまりの気持ちよさに、指が止まらない。  
自分の口から、自分の声とは思えない  
可愛い声が出てくる。

「僕」「ひっ！な、何か来るっ！ ひいひいっ！」

愛液があふれだし、パンストに染み込んで垂れ、匂いと音が響き始める頃、  
僕は生まれて初めての女性の性的絶頂を迎え、身体を震え上がらせた。  
こんな美少女がオナニーで絶頂している。しかもそれが僕なのだ。  
僕はその事実、この上無い幸福感を感じ、さらに絶頂の快楽で頭が真っ白になってしまった。









【僕】「…はあっ…はあっ…」

絶頂の快楽をじっくりと堪能した僕は、呼吸を整えて、改めて自分を見る。

夢にまでみたミコトちゃんが

目の前の鑑に映し出されている。

僕は自分の身が愛おしくてたまらなくなり、

膝を抱えるように脚を触り、膝に顔を埋め、

両腕で抱きかかえるように、胸を變形させながら触り、

サラサラのロングヘアーにキスをするように頬ずりし、

全身から漂うほんのり甘い匂いを、胸いっぱい吸い込んだ。

【僕】「やばっ…こんな最高の身体が、僕の物だなんて…」

僕は再び割れ目に指を伸ばし、まるで猿のようにオナニーを繰り返していた。









【僕】「流石に疲れたな…それにおなかも減った！」

ミコトちゃんの体は体力が有り余っており、何度イッてもすぐに回復してくれる。

おかげで、僕は日が暮れるまでオナニーを続けてしまったのだ。

それにしても、VR空間でも日が暮れ、

3Dモデルでも疲労して空腹になるのか。

そもそも、僕がミコトちゃんの体になった時点で、

ここがどんな世界でもおかしくは無いわけだ。

【僕】「…何か食べるものないかな…」

そういえば、この部屋には冷蔵庫のモデルは作っていなかったたので、食料は無い。外に出れば別の空間につながるかもしれない。僕はそう思い、部屋の外へと出た。





